

## 美浦の特産品、現代は米、縄文時代は貝!?

稲刈りがおこなわれる季節になりました。数千年前の縄文時代にはまだ米作りがおこなわれていません。縄文人は、秋にはクリやクルミ、ドングリなどの堅果類を採取したり、イノシシやシカなどを捕獲していたことでしょう。さらに縄文時代の美浦村地域は霞ヶ浦という豊かな海に囲まれ、豊富な海産資源も得られていました。その一端を現在も見ることができるのが貝塚遺跡です。上の写真は美浦村の貝塚でよく見られる、つまり縄文人が海から採取してきた貝です。現在の私たちの日常生活では食べない貝の方が多いかもしれません。

美浦村の縄文人が一番多く採取した貝はハマグリです。ほかの貝もハマグリと同じような干潟の環境にすんでいる美味しい貝です。

さる7月、美浦中学校の生徒の皆さんは、文化財センターで職場体験として、貝塚の貝を調べる体験をしました。



▲職場体験で貝塚の貝を調べている様子

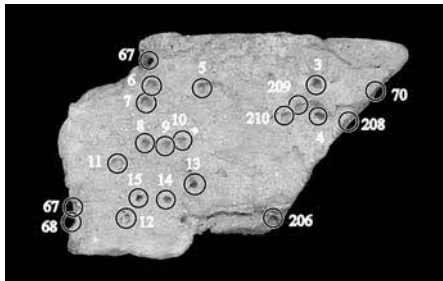
内出遺跡で出土した**石器**には、製作や利用に関わる二つの特徴がみられます。

小形の石器である弓矢に用いる石鏃（せきぞく）や孔をあけるための石錐（いしぎり）は、主にチャートと呼ばれる固い堆積岩で作られていましたが、他に石器をつくる過程で生じた石片がたくさん見つかり、それらから作り方が推測できます。拳より小さなチャートの円礫を台石に置いて上から石などのハンマーで叩くと、上下両方から力が加わり薄い破片が生じます。石鏃や石錐はそのような石片をさらに加工してつくられていました。チャートは県央～県北地域にかけての広い地域でとれる石で、円礫が材料として遺跡に持ち込まれたものと思われま

す。木の伐採、加工道具である石斧は、磨いて刃をつくり出した石器ですが、緑色岩という緑色がかった重く固い変成岩が多く用いられています。緑色岩については県北に産地がありますが、遺跡で石斧をつくった痕跡は認められません。おそらく完成品として内出遺跡に持ち込まれたようです。一方、石斧は使っているう

ちに割れたり、切れにくくなったりしますが、それを打ち剥ぎによって形を整え直し、再び磨くことで、小形の磨製石斧に作り替えたり（再生）、他の石器にしたり（転用）した事例が多数みられました。それは再生・転用した石器に、元の石斧の古い磨いた面が部分的に残っていることや、磨かれた面を残す小さな石片が出土していることから推測されます。緑色岩という石器に適した石材を大切に使っていたのでしょう。

建物跡から推測すると、両遺跡とも縄文時代については、少人数の人々が一時期暮らしていた小さな生活跡と考えられますが、土器や石器の在り方は、当時の暮らしの一端を垣間見せてくれます。土器の模様は関東東部地域の人々のつながりを示し、石材にこだわった石器の在り方は、道具づくりにしっかりとした技術があったことを想像させます。さらに、縄文時代前期に貝塚を残しながらも、同時期の建物跡など住んでいた痕跡がみつからない陸平貝塚との関係も注目されます。



▲小さな穴が痕跡  
穴のレプリカを拡大した写真 白縦線が1mm▶  
図4 シソ属の実の痕跡が見つかった土器片

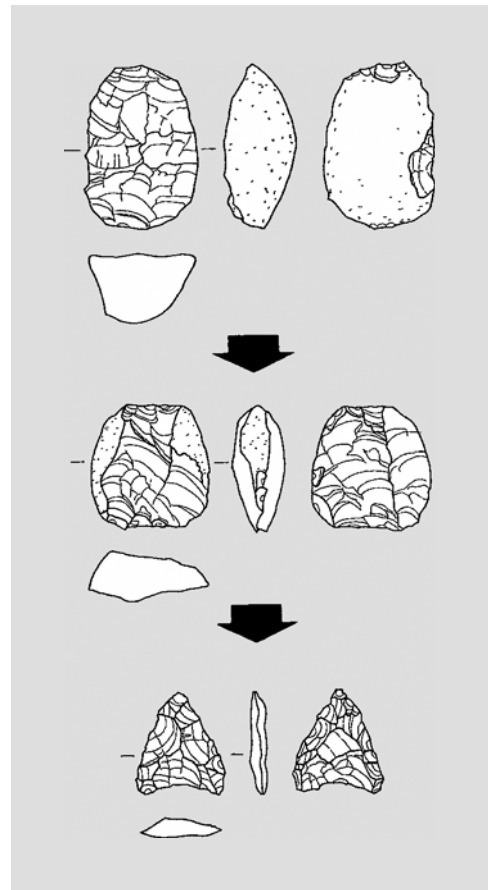
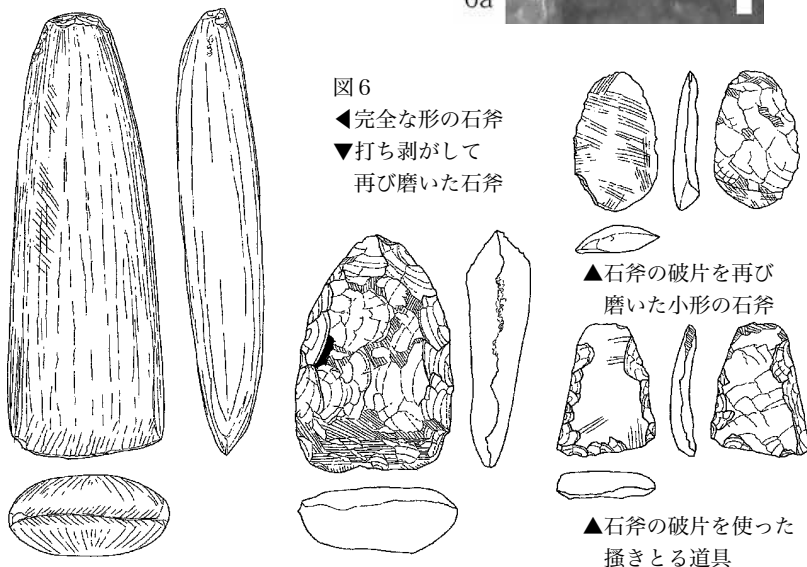
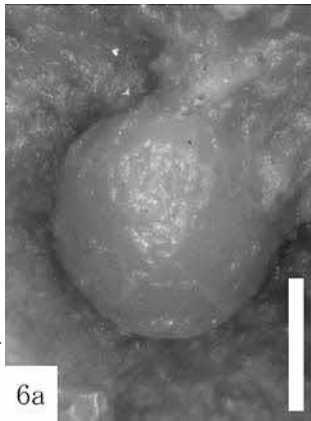


図5 チャートの円礫からつくられた石鏃

# 遺跡発掘情報! きねだ 木の根田・内出遺跡 ~縄文編~

木の根田遺跡と内出遺跡は、昭和の終わりから平成の初めにかけて進められた安中地区総合開発（現在の美浦ゴルフ倶楽部とおかだいらゴルフリンクス）に伴い発掘調査が実施された遺跡です。村のシンボルである国指定史跡の陸平貝塚は、この開発の際、企業の多大な協力や研究者の支援によって、完全に近い形で保存されました。

両遺跡は、陸平貝塚の南東にあたる大山地区に位置し、平成3年と平成4年に、地元の方や明治大学の学生らが参加して発掘調査が行われました。発掘から30年近く経ってしまいましたが、少しずつ出土した遺物の整理作業や、分析が進められ、ようやく本年、発掘の成果をまとめた報告書が刊行されました。両遺跡からは縄文時代の遺物と古墳時代の建物跡が多く見つっていますが、今回は縄文時代について紹介します。

木の根田、内出遺跡とも、ほぼ全域を発掘しましたが（木の根田遺跡は約4,000㎡、内出遺跡は約1,500㎡）、縄文時代の建物跡はそれぞれ1軒しか見つかりません。しかし、遺跡内からは多くの縄文土器の破片や石器が出土しました。出土した土器は縄文時代前期（約7,000～5,000年前）にあたるものがほとんどで、建物跡や石器も同じ時期のものと考えられます。

図1は木の根田遺跡の建物跡からみつかった縄文土器です。前期の前半に関東東部において盛んにつくられていたタイプのもので、粘土のなかに繊維を混ぜ込んだ痕跡がみられることや、複雑に撚った縄を転がした上に篠竹を割った道具で、口や上部に線文を描いているのが特徴です。一方、内出遺跡からも片口がついた前期前半の土器（図3）が出土していますが、建物跡から出土した土器は前期でも後半にあたる「浮島式」とよばれる土器で、粘土に繊維を含まず、篠竹を割った道具や貝殻で文様をつけているのが特徴です。ちなみに「浮島式」も関東東部特有の土器で、稲敷市浮島にある貝塚から名づけられました。

また、木の根田遺跡の繊維を含む土器片の中には、表面に多くの小さな穴がみられるものがあり、専門家にレプリカ法※で調べてもらった結果、エゴマやシソといったシソ属の実の痕跡であることが分かりました。おそらく土器をつくる時に、採取していた実が混じってしまったものと思われます。縄文土器に多量に種実の痕跡が残された例は全国で見つっていますが、木の根田遺跡の事例は古い部類に属し、当時の植物利用を研究する上で貴重な発見となりました。

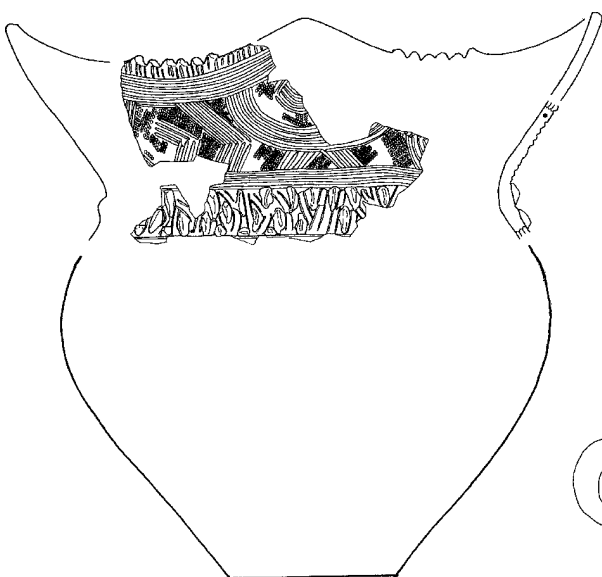


図1 関東東部特有の前期前半の土器（木の根田）

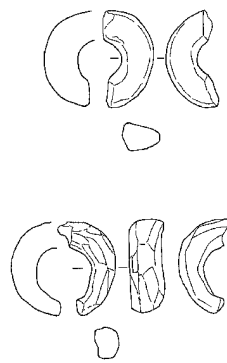


図2 前期後半の土製耳飾（内出）

図3 前期前半の片口土器（内出）▶

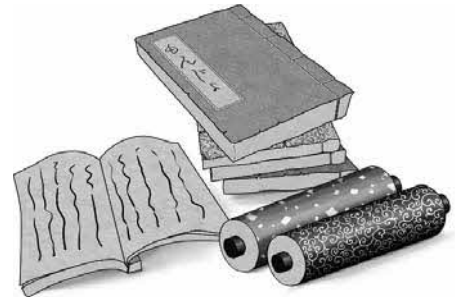


※レプリカ法 種や実の痕跡である穴に、樹脂を注入して型（レプリカ）をとり、それを詳しく調べる方法。

# 古文書講座参加者募集

村内に残る古文書（江戸時代から明治初期）を読んで、美浦村の歴史に親しもう。

- ◆実施日 全6回の連続講座。いずれも日曜日
  - ①10月10日 ②11月14日 ③12月 5日
  - ④ 1月16日 ⑤ 2月13日 ⑥ 3月13日
- ◆時 間 午前10時～12時
- ◆場 所 文化財センター
- ◆講 師 平田満男先生（美浦村文化財審議委員）
- ◆申し込み 文化財センター 電話 886-0291  
※9月1日（水）より受付（先着）
- ◆募集人数 10名 ※対象：美浦村及び県内在住者
- ◆参加費 500円（資料代）



※新型コロナの感染拡大にともない急きょ中止になる場合があります。

## 木村大さん陸平で撮影

美浦村出身のギタリスト木村大さんが美浦村の懐の深い魅力を伝えられればと、今年の2月に陸平貝塚で撮影をおこなった「星めぐりの歌」のミュージックビデオが現在公開されています。

<https://youtu.be/LWhIRkqR5Fs>

## 文化財センターにご来館される皆様へお願い

新型コロナウイルス感染拡大予防のためご協力をお願いいたします。

- ・マスクのご着用
- ・文化財センターの出入り口にて手・指の消毒
- ・職員が非接触温度計にて検温をさせていただきます。



## イノシシ注意

陸平貝塚公園内ではイノシシ捕獲のためにワナをしかけている場所があります。目印で表示してありますので進入しないようにお願いいたします。

イノシシは夜間に行動していることが確認されています。



## 表紙の貝のこと

写真の貝の中で、私たちが身近に入手できて食べている貝は、アサリやマガキ、ハマグリでしょうか。カキは養殖ものの大きなものを食べていますね。貝の名前から気がつかないかもしれませんが、刺身でみかけるアオヤギはバカガイの身の一部です。サルボウは、赤貝の缶詰に利用されています。マテガイは細長い貝で貝殻が薄くて割れやすく、写真も右側3分の1ほどが欠けています。アカニシはサザエに形が似ています。たまに外国産のアカニシを刺身のコーナーで見かけることがあります。ハイガイは約5000年前の縄文時代前期の貝塚でよく見つかると、ほかの時期の貝塚では見つからない貝です。環境の変化により生息域も変わったのです。もっとご紹介したいのですが今回はこのへんで。

## 陸平貝塚公園までの交通アクセス

- 【車】 by car  
常磐自動車道「桜土浦IC」より  
国道125号バイパスで約40分  
圏央道「稲敷」より15分
- 【バス】 by bus  
JR土浦駅より西口①バスのりば  
木原経由江戸崎行き  
「谷津入」下車 タクシーで約5分  
または「大谷」下車 3.5km

